

ハウスのオブ・ヤマナカ 東洋の至宝を欧米に売った美術商

狭義の美術史・美術批評に留まらず、作品の流通やそれをとりまく状況的な視点なども取り込みながらアプローチする研究が盛んになっている。本書は一般書だが、その点で美術研究の現時点での最新の成果として読むこともできる。

取り上げられている「山中商会」は、一九世紀末にニューヨークに店舗を構え、今日私たちが米国の主要美術館で目にする多くの日本美術の売買に関わった。収集家としてフリーアやロックフェラーを顧客とし、日本美術の地位向上にも多大な貢献をした。が、その名が語られなくなって久しい。いわば「忘れられた美術商」だ。

なぜ、山中商会は歴史の表舞台から消えてしまったのか。いくつかのことが考えられる。ひとつは、彼らの主な活動が米国内でなされていたこと。つまり、資料の問題だ。第二に、従来の研究では、美術商の果たす役割や意義を軽視する傾向があった。更には、第二次世界大戦の勃発により、山中商会の米国内での資産が敵国のものとして接収されてしまったことも大きい。

在ニューヨークの著者は、この三つの問題を驚くほど粘り強く追うことで解決している。請求書や領収書におよぶ残された資料や、山中商

「消えた」美術商を発掘



東ヨフの破踏『オブの』にユリ子著全ル。きま住一どち生在メなく都クル旅』
◇京一エル

会の資産がオークションに掛けられ解体されていく詳しい過程は、これまでまったくわかっていなかった。著者も言う通り、日系企業の資産が戦時中どのように扱われたかを知るうえで、貴重な機会となるだろう。

明治に入り、日本美術はまず貿易品として欧米の注目を集めた。その後、旧文部省の管轄下、美術は文化と教育の名のもとに置かれるようになる。が、少なくとも出発点では、流通的・興業的視点が大いに奨励されていた。山中商会が忘れられたのは、国内でのこうした力学の変遷とも無縁ではあるまい。価値観の固着は今日に至る。本書は古の日本美術に留まらず、いま私たちが最新のアートをどう捉えるかという点でも示唆に富む。